

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號六第

卷六十三第

行發日一月六年八和昭

## 論叢

唯物史觀の第三史觀への接近 . . . . . 文學博士高田保馬  
 我國の國民所得 . . . . . 經濟學博士沙見三郎  
 爲替心理說評價 . . . . . 文學博士米田庄太郎

## 時論

異常所得の課税 . . . . . 法學博士神戸正雄

## 研究

フランスにおける爲替動搖と安定策 . . . . . 經濟學博士吉彦  
 わが國に於ける百貨店出張販賣の發展 . . . . . 經濟學士堀新一

## 說苑

ナダム・スミスに於ける經濟史觀 . . . . . 經濟學士白杉庄一郎  
 英國に於ける預金の流通速度 . . . . . 經濟學士大野榮一郎

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題  
 本誌第三十六卷總目錄

(禁轉載)

# アダム・スミスに於ける 經濟史觀

白杉庄一郎

マーシャルはその「經濟學原理」の冒頭に「世界史の二大形成動力は宗教的動力と經濟的動力とであつた」と言つてゐるが、歴史に於けるこの經濟的規定力について經濟史觀なるものが考へられる。人間の經濟生活はその精神生活一般を制約するが、反對に精神生活の諸過程は復、物質的な經濟生活に影響を與へるのであつて、この二つの生活過程は對立して相互作用の關係にある。この對立を克服して、物心兩生活を統一するものは行爲即ち實踐である。だから歴史に於ける物質的なものと觀念的なものとは一方のみが優越を争ふことなく、具體的實踐的な史觀に於ては、その楔機として、その中に止揚されねばならぬ。觀念史觀が排

アダム・スミスに於ける經濟史觀

さるべきであると同じく、字義通りの唯物史觀は探られ難い。(註一)より、高き具體的な史觀に對する止揚的楔機として、歴史の社會的實在の經濟的規定面を觀る立場それを我々はこゝに經濟史觀といふ。(註二)勿論それは、具體的な歴史の社會的實在の一面的把握である。

註一 歴史に於ける物質と觀念との對立を止揚しつゝ、その人の性格、及び、場合によつては、實踐的意圖とから觀念的或は唯物的の名稱に固執することがある。然しそれは既にこゝにいふ具體的實踐的立場に立つてゐるものと考ふべきであつて、本文に述べた意味に於ける觀念史觀でも唯物史觀でもないのである。

註二 「歴史的社會的實在に於ける諸文化域は相互作用の關係に立てるものなるが故に、一の文化域の眞に歴史的なる研究は他の文化域との相互關係に於てなされねばならぬ……而して所謂經濟史觀なるものはこの諸文化域の相互作用の一方面を見たものであつて、即ち經濟的文化域より諸文化域が規定せらるゝ面を見たものである……」<sup>2)</sup>

今、私はアダム・スミスの「富國民論」によつて、右の意味に於ける彼の經濟史觀を探らんとする。然して以下述べんとするところは、同書に散見する、かゝる

第三十六卷 一〇一九 第六號 一二三

1) Alfred Marshall, Principles of Economics, p. 1. 大塚氏譯(改造社) 41頁。  
2) 石川興二教授「精神科學的經濟學の基礎問題」302頁。

見解の總括であるが、叙述の便宜上、スミス經濟學の究極目的、分業論、法律並に政治組織觀、社會的意識諸形態に關する見解、及び階級觀の五つに分つて考へる。而して階級觀についてはこれを別に考察することとする。先づ彼の經濟學の究極目的より始めよう。

二

アダム・スミスの經濟學は元、精神哲學(Moral Philosophy)の一部門であつた。精神哲學は『人生の幸福と完成』(The happiness and perfection of a man)をその目的とする。經濟學はこの目的に指導されて『國民を富ます』ことを以つてその究極目的とする。即ちスミスは經濟的手段によつて『人間の幸福と完成』を増進せんとしたのである。<sup>1)</sup>

然してこの目的を達成することは、當時の社會制度を變革することによつてのみ可能であつた。それは封建的な束縛と獨占の制度から『自然的自由の制度』(The system of natural liberty)への轉廻であつた。自由の制度に於ては一段の幸福完成が待望される。社會は經濟

組織を樞軸として動く。スミスは社會變革の支點を經濟組織に見出したと考へられる。

右の如き見解が、明確に自覺された形に於てはなかつたにせよ、スミスにあつたものと考へざるを得ない。然らざれば、實踐學としての彼の經濟學は無意義であり、道德哲學から經濟學が如何にして生れて來たかは解かれ得ない。だからスミスの經濟學の根柢には暗黙的にはあるが、經濟史觀が動いてゐたと云ふ事が出来る。かく考へてこそアリストテレスに於ては全體の含蓄的に精神科學の中に含まれてゐた經濟學が、スミスによつて一科獨立の科學にまで取出された事、<sup>(註)</sup>即ち經濟學の道德哲學からの分化は理解され得るのである。<sup>3)</sup>

註 このことはアリストテレスがその『倫理學』中に於て『友情』の基礎に認めたところの『自愛心』を、スミスは人間社會の紐帶として取出し、これと分業——分業は後に述ぶる如く自愛心に導かるゝ交換の性向によつて生ずるが——との結果生じた『商業的社會』を彼の經濟學及び實踐の對象としたことと相應する。即ちスミスは利己心を

1) 前掲書244頁以下參照。  
 2) 實踐學の性質については前掲書第二編第三章三の(二)參照。スミスの『富國  
 民論』が全體として實踐學であることについては同書第三編第七章參照。  
 3) Cannan はグラスゴー大學の「道德哲學講座」の傳統上幾分經濟學を講ずる必  
 要があつた」としてスミスの「決して忘れることのない Dr. Hutcheson」  
 の影響を述べてゐる。(Wealth of Nations, ed. by E. Cannan, Vol. I, P.

以つて彼の經濟理論の礎石としたのであつて、こゝに彼の人間觀に基く自然主義を認め得るのであるが、これについては別の機會に述べよう。

然らば如何にして、スミスにかゝる見解が可能であつたであらうか。個人的並に社會的の生の事情及び歴史の社會的の思想的聯關が考へられねばならぬ。こゝにはたゞ社會的の生の事情につき一言するにとどめる。即ち經濟なる「生活域の相對的獨立」の狀態がこれである。ルネサンス以來科學の進歩漸く起り、物質文明は俄に其の勃興の緒についた。都市經濟ツンフト的産業の崩壞、海外市場の擴大、マニファクチャーの發生等經濟生活は著しく複雑となり、社會生活に於て經濟が支配的となつた。「世界史は宗教力と經濟力とによつて支配された」と云はれが、こゝに至つて始めて中世の宗教力支配に代つて、經濟力の支配は直接的に表面化して來た。(これが一層明確となるのは産業革命以後のことであるが)かゝる社會的事情は人間の意識に映らざるを得ない。スミスは「人生の幸福と完成」が社會の大多數の人々に於て、經濟生活に拘ることを發見し

アダムスミスに於ける經濟史觀

たのである。人間の意識は實在に働きかける。彼は右の如き實在本質觀に基いて、社會を變革せんとしたのであつて、實にスミスは「經濟の方面でのルーテル(Luther)であつたのである。

要するに、スミス經濟學の根柢に經濟史觀の存することは理解される。即ち彼は社會變革を經濟組織の變革に求めたのである。然し彼は經濟變革そのものゝ動力因は、むしろ之を政治的手段に求めた。國家は國民を護り、彼等自らをして自由に活動せしめよ。然らば自然的自由の制度は自ら實現せらるゝであらうと。それがマルクスに於ては經濟自體の發展も亦、對立的な經濟的動因に求めらるゝに至るのである。それはともかくとして、スミス經濟學成立の根柢については以上にとどめ、この見解が經濟理論を扱ふに當つて如何に現はれるかを見ることにしよう。

### 三

スミスの經濟理論は分業論を以て始まる。分業(Division of Labour)といふ社會組織はマルクスの云ふ生産

XXXV—XLI, Editor's Introduction) 然しやはりそこでは經濟學は未だ道德哲學の中に含まれてゐたのである。

- 4) Dilthey, Einleitung in die Geisteswissenschaften. W. Dilthey's gesammelte Schriften. I. Bd. S. 39.
- 5) Alfred Marshall: Principles of Economics. p. XVII. 大塚氏邦譯(改造社) 41頁。

關係の一である。人間が富の生産をなすに當つて有つところの人と人との關係である。然らばこの分業は如何にして發生するか。スミスは「富國民論」第二章の冒頭に於て曰く。

「かく幾多の利益が出て來るこの分業なるものは、元々その來す社會一般の前以つて知り且つ志す何か人智の結果ではない。分業は何らかゝる廣大なる效用を眼中に置かざる人性の或る一傾向から、頗る緩慢漸次ながら、必然に生じた結果である。乃ちそれは、一物と取引し、交易し、交換する人類自然の傾向之である。」<sup>1)</sup>

即ち分業は人間に固有の物と物とを交換する傾向に基いて成立する。それは人間の意識的活動の産物ではなく、又意欲された結果でもない。人間性の必然的な結果である。こゝに我々は、スミスが分業即ち社會組織を發生的に研究して、その起原を人間の性情の中に發見し、そしてその必然的産物と見做した點に、彼の分業論に於ける經濟史觀的見解の第一を觀取するのである。<sup>2)</sup> 即ち分業は「人間の社會的生産に於て一定の・必然の・彼の意志より獨立せる」社會關係である。

かくて成立せる分業は人間の生活諸過程に對して如何なる關係を有つか。生が創造した表<sup>3)</sup> 現<sup>4)</sup> は再び生を規定する。一旦成立した分業は個人に獨立のものとして、人間に對立し彼に働きかける。スミスは人間の才能に關し天賦の才能よりも分業即ち經濟組織に規定される事の大なるに注意してゐる。曰く。

「異なる人々それ々の先天的才能の相違は事實吾等の考へる程著大なものではない。その成人した時に異種の職業に従事するものを劃然區別する様に思はれる天稟の著しい相違は、多くの場合、分業の原因と云ふよりは寧ろその結果といふ方がいふのである。最も異なる性格の人、例へば哲學者と普通仲仕間の才能の甲乙は、生來の性質から出て來ると云ふよりは、寧ろ後天的の習慣、慣習、教育等から生ずるのである。彼等が生れて出て來た計りの六才か八才迄の間は恐らく互に頗る類似してゐて、其兩親でも遊び仲間でも二人の間に何等著しい選庭を認め得なからう。丁度その歳頃又はやがて、彼等は各非常に違つた職業に従事する様になる。そこで兩者才能の差等は目立ち、段階が際立つてついて來る、終に哲學者は慢心に驅られて何か似寄りの點を認めることをあまり屑としない……」<sup>4)</sup>

6) Smith, Wealth of Nations ed. by Cannan. II. p. 267-8. I. P. 80. 83 等參照  
7) Marx. „Nationalökonomie und Philosophie“ (Der Historische Materialismus. Herausgegeben von S. Landshut und J. P. Myer. I. S. 268) 及び Engels. „Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie.“ (Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx und Friedrich Engels 1841 bis 1850. Herausgegeben von F. Mehring. I. S. 436) 參照。

こゝにスミスの徹底せる平等主義と非天才主義を見る。人は生れながらにして平等である、が、一切の社會的不平等は分業に基因するとスミスは考へる。前述せし如く分業は「人間の生の社會的生産に於て一定の必然的の彼等の意志より獨立せる」社會關係であつて人間の才能に差異を生ぜしめ、精神的の生活諸過程をも制約することを、スミスは認めてゐるのである。これ分業論に於ける經濟史觀的見解の第二である。

然し右の個所に於てはスミスは分業を讚美し、たゞ事の序に分業が社會的不平等の原因であることを一言せるに過ぎないのであつて、第五編第一章第二節に於て始めて分業の弊害を問題としてゐる。蓋しそれは彼が分業發達の初期に生を享けたがためであつて、むしろ分業によつて資本制生産方法を産み出し、促進する事が、彼の歴史的實踐的使命であつたからである。而も資本制生産に用ひられたる分業の弊害の若干を既に早く豫測して、之に對する解決の方策をも與へてゐたと考ふ可きである。<sup>(註)</sup>

註 さればマルクスも云ふ。「分業の不利益な諸結果を説明したアダム・フアーガソン(A. Ferguson)の門弟として、

アダム・スミスは、これらの點につき徹底的にはつきりしてゐた。」と。又、マージナル曰く「アダム・スミスは一面に彼の時代には未曾有の速度をもつて發展しつゝあつた微細な分業と微妙な産業組織との一般的利益を主張しつゝもなほ、細心であつて、該制度の失敗した多くの點と該制度に伴ふ幾多の附帶的弊害とを指示した。併し彼の追隨者の多くは、哲學的識見も劣り又或る場合には世界についての眞實の知識も劣つてゐたため、在るもの即ち悉く正しいと大膽に論じた。」と。

扱てスミスは分業の弊害を説いて云ふ。

「分業の發達につれ労働により生活する人々の則ち大多数人民の大部分 (the far greater part of those who live by labour, that is of the great body of the people) の従事する職業は、少數の至極簡單な然り屢々一、二の頗る單調單純な作業に限られることとなり、此の單純な作業をすればいゝ譯である。ところで人々の大部分の悟性その理解力 (understanding) は彼等の従事する日常の仕事によつて必然につくられる、全くその一生涯が少數の簡單な作業——その結果が恐らく殆んど常に同一であるか、若くはまあ殆んど同一なる——を行ふことに費される人は、決して起りつこない困難を取除く手段の發見に其の悟

- 1) A. Smith, "The Wealth of Nations." Edited by E. Cannan. Vol. II. P. 15. 竹内謙二氏邦譯「國富論」(改造文庫)上卷 118頁——"the propensity to truck, barter, and exchange one thing for another."
- 2) 河上肇博士「經濟學大綱」547頁參照。——博士はそこでスミスのこの見解をマルクスの史觀に相通ずるところがある旨を述べられてゐる。
- 3) この表現と生との辨證法的關係については本誌第三十四卷第六號石川興二教

性を努めて働かせ、又はその工夫をこらさず必要がない。それ故、彼はかゝる努力の習慣を自然に失ふ。そして彼は人間として成る事の出来る限り通常愚鈍となり無智となる。彼の心の無感覺な魯鈍は、彼をして、たゞ道理のある談話に興味を感じ又はそれに加はる能はざらしめるのみならず、亦寛大な、高尚な若くは感動し易い感情を懐く能はざらしめ、隨て個人生活上の日常の義務の多くについてさへも正當の判断を下す能はざらしめる。彼の國の重大なそして廣大な利害問題については彼は全然これを判断し得ない。そして彼をしてさうさせないために至つて格別の勞がとられなかつたならば、彼は等しく亦戰時に彼の國を防禦することも出来兼ねる。彼の激んだ生活の單調にして變化なきことは彼の心の勇氣を自然に賊害する、そして彼をして嫌惡の念を以て、不規則な、不確な、冒險的な軍人生活を觀させる。彼の千變一律な沈滞的生活は彼の肉體の活潑な活動をさへも殺し、そして彼が從來仕込まれて來た職業以外の如何なる職業に於てなりとも氣力と堅忍不拔の忍耐とを以てその力を出す能はざらしめる。彼自身の職業上のその技巧は斯様にして、彼の智的社交的及び尙武的徳を犠牲として取得された様に思へる。さりながら、すべて進歩發達した文明社會に於ては、げにこれこそ、政府にして之を防ぐの勞をとるに非ざれば、勞働貧民、則ち、大多數人民 (The Laboring poor, that is, the great body of the people) が必然に陥らざるべからざる状態なのである。」

大多數人民の理性は彼の従事する日常の仕事によつて必然的に形成される。意的並びに情的の働きも亦實に「人の性格はその日常作業によつて作られる」のである。分業は智的、社會的、尙武的等諸々の徳を破壊する。そして分業は分業社會に最も好都合なるこれらの諸徳を人間に附與する。「人間の意識が彼等の存在を規定するのではなくて、むしろ逆に人間の社會的存在が彼等の意識を規定する。」これスミスの分業論に於ける經濟史觀的見解の第三である。

以上我々はスミスの分業論に於ける見解を見て來た。既に知つた如く自愛心とそれに導かるゝ交換の性向とによつて必然的に發生したる分業を基礎とし、更に之に自愛心が結びつくことによつて、人間の社會は必然的に「商業社會」(a commercial society) となる。この「商業社會」は人間の生産關係の總體であつて、社會の物質的基礎を形成するものと考へられる。だから我々

授『思想對策批判』第六七頁以下參照。

- 4) W. o. N. I. p. 17-18. 前掲邦譯 1221-23頁。
  - 5) Marx: Das Kapital. I. B. S. 309 Note 70 河上宮川譯第一卷上 931-932頁。
  - 6) Marshall, Principles of Economics. p. 246. 大塚氏譯第二分冊、177頁。
  - 7) W. o. N. II. p. 267-8. 竹内謙二氏譯「富國論」(有斐閣版) III. 116-117頁
- ここで經濟の世界が、如何に生に對する否定面として必然の世界である

は社會の基礎構造に對するスミスの重要な經濟史觀的見解を見た譯である。次に我々は上部構造に對する彼の見解を見よう。

#### 四

スミスは道德哲學或は精神哲學 (Moral Philosophie) の講義の第三部に於て、法律政治の理論中、正義の原則に關係ある部分を論じた。後、この部分の講義發見されて出版せる、「Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms」(1896) はこれである。その内容は太古から現代に至るまでの法學の發達を研究し、また諸種の産業が法律及び政治組織の改善ならびに變化の上に及ぼす影響を研究するに在つた。」とすれば既にこの頃からスミスの思想の中に經濟史觀の萌芽があつたのである。<sup>1)</sup> 然してこの講義中の或る部分が獨立せしめられて「富國民論」となり、一科獨立の科學に仕立てられたのである。源にあつた思想は一貫して流れる。我々は「富國民論」中に於て、法律的並びに政治的上層建築に關する彼の思想を跡づけよう。

アダムスミスに於ける經濟史觀

法律制度は經濟活動の必要から生れ、且つ經濟組織の變化と共に變遷することは、彼の所々に述べてゐるところである。こゝには、その一例として利子禁止或は制限令について述ぶる所を見よう。

「若干の國々に於ては、貨幣の利子は法を以て禁止されて來てゐる。然し乍ら、貨幣の使用により何地にあつても或ものが獲られ得るのであるから、何地にあつても、貨幣の使用に對して或ものが支拂はるべきである。利子禁止の此の制規は高利の害惡を防遏するよりは反つて是を増長するものなることが經驗上知らるゝに至つた。何となれば債務者は常に貨幣の使用に對して代償を支拂はざるべからざるのみならず、又債權者が此貨幣使用の代償の受領について冒す危險に對しても亦その代償を支拂はねばならぬからである。然り債務者は高利の刑罰に對して其債權者を保險——と云つていふならば——するを餘儀なくされてゐる譯である。<sup>2)</sup>」

又「如何なる法と雖も、通常利率を、其法の制定當時に於ける最低普通市場利率以下に引下げ得ない」ことをフランスの例によつて示してゐる。<sup>3)</sup> 經濟の實際に逆行する法制が如何に無力であるかを知つて、彼は實際に即した法の制定を勧め、封建的桎

かといふ事はつきり認識されなければならぬ。この必然の世界の合理化は労働時間の短縮によつてのみ可能である。これについては別の機會に詳論するであらう。

- 8) Marshall: Principles of Economics, p. 2. 大塚氏譯第一分冊. 42頁。  
9) Marx: Zur Kritik der Politischen Ökonomie. (Kautsky). Vorwort. S. LV.  
10) W. o. N. I. p. 24. 竹内氏譯(改造文庫)上. 132頁參照。

枯の打破に努める。

政治組織——スミスは政府、即ち政治組織(civil government)の起原とその必要を財産關係から説明する。曰く。

「其の所を問はず凡そ大財産の存する處、こゝに大不平等がある。豪富の富者一人に對して少くとも五百の貧者があるに相違ない、而してこの少數者の裕福は多數者の貧窮を前提し假想する。富者の裕富は貧者——貧者は缺乏窮迫に驅られ嫉妬に煽られて富者の占有物を侵すに至る事屢々ある——の憤慨を激昂せしめる。されば孜々營々多年の勞働により、又恐らくは數世代の勞働に依りて獲得される夫の貴重高價なる財産の所有者が枕を高くしてたゞの一夜たりとも安心の眠を貪り得るは、獨りたゞ政府の庇護の下に於てのみである。富者は始終見知らぬ敵に取圍まれてゐる此敵を彼は、縱令是を憤怒せしむること決してなくとも、亦到底宥めるを得ないのであつて、此敵の加ふる不正より彼は此不正義を懲罰せんがために絶えず振上げて置かれる政府の力強い腕に依りてのみ保護され得る。それ故に貴重なるそして廣大なる財産の獲得は民の政治を掌る政治組織の確立を必要とする。財産を毫も存せざるか、又は少くとも二三日の勞働の價値を越ゆる何物も存在せざる處に在りては政府即ち政治組織は左程必要ではない。」<sup>1)</sup>

然も政府は服従を前提とする。服従の原因は四あり、人格、年長、財産(fortune)、身分(birth)の優越である。

この中で決定的に有力なのは、財産である。身分の優越も支配者たる重要な原因であるが、それも結局、財産の優越に歸着する。即ち「生れ門地の優越は、是を主張する者の家族に在りては夫の身代財産の優越を前提する」<sup>2)</sup>からである。スミスは財産と身分の優越が如何に支配關係を形成するかを牧羊民を例にとつて明かにする。そして彼は從來の歴史では財産が決定的であつた事を認める。かくて、スミスは倫理學者が峻別しうとするオイヤクテイ權威をもベウワ權力に還元する。要するに、財産關係——生産關係の法的表現——は支配關係を生むのである。

更に財産關係の侵害を保護せんとする施設は司法制度(Judice)を惹起すが、この司法制度そのものさへその初期に於ては王の財産収入を目的としたものであり、裁判官は王の収入のためにする徴稅官吏の如きものであつた事を述べて、財産關係との二重の關係を見てゐ

1) 以上河上博士「經濟學大綱」523頁以下による。  
 2) W. o. N. I. p. 338. 竹内氏譯上卷 754頁。  
 3) ibid. p. 339. 邦譯 755頁。  
 4) ibid. II. p. 203. 邦譯(有斐閣版) Ⅱ. 24—25頁。  
 5) ibid. II. p. 205. 邦譯同 Ⅱ. 28頁。  
 6) ibid. II. p. 207 以下參照。

る。<sup>6)</sup>

政治組織に關聯して我々は經濟關係と政黨との關係に對する『講義』に於けるスミスの見解を、キヤナンの序文の中に次の如く讀むが、スミスはこの點に關しても眼光頗る銳しと言ふべきである。即ち「租税は分つて所有物(土地、資本及貨幣)に課する財産税と貨物に課する消費税となす、土地に課税するは容易であるが資本又は貨幣に税するは難い、地租はその徴收費頗る少く且つ貨物の價格を騰貴させない、さればこれらの貨物を商ふに足る資本を持つ人々の數を制限して少くしない。地租も消費税も兩ながら納めねばならないとは地主にとつてつらいことである。この事實が恐らく所謂トリライ黨を存續させるのである」(Lectures, p. 241-242)<sup>7)</sup>

次に政權教權の没落の説明を聞かう。「諸々の手工業製造業の未だ勃興しない前、かの歐洲の舊狀にあつては」諸侯又は僧侶はその大なる收入を單に多數の人々に施すといふ以外の用法がなく、その結果多數の人々の歸屬によつて、諸侯又は僧侶は自己の權力を盛んにする事となつた。然るに「諸々の手工業、製造業及び商業の漸次的發達」は彼等の收入を之に向けしむることとなり、その結果、自己の歸屬者を失つて、商工業

アダムスミスに於ける經濟史觀

を發達せしめ彼等の權力を没落せしめる事となつた。<sup>8)</sup>而もその反面に漸次勢力を得つゝあつたのが第三階級である。その力は飽和點に達して爆發した。これがブルジア革命であつたのである。

以上から、スミスが法制上及び政治上の上層建築をそれが、その上に生ひ立つたところの、社會の經濟的構造から説明せんとしてゐるのを看取し得るであらう。勿論不完全ではある、が、彼の慧眼なる經濟史觀を否定し得ないのである。

### 五

我々は既に分業論に於て、人間の性格、意識が如何に社會的に規定されるかを見た。再びこゝに今少しく之を問題としよう。

スミスは既に早く“Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms.”に於て、商業——彼は經濟社會を商業社會に於て把握したが故に、商業は、全經濟活動を意味する——の人民風習に及ぼす影響を特にその弊害を考察した。商業的精神(commercial spirit)のため人々

第三十六卷 一〇二七 第六號 一三一

7) ibid. I. Editor's Introduction. p. XXV.  
8) ibid. II. p. 285 以下。石川教授「精神科學的經濟學の基礎問題」301-302頁參照。

の視野は狭くなり、分業は人を愚鈍にする。親達は早くから子供を働かせるので教育は閑却される。讀書は出來ず、高尚な思索は全く不可能である。<sup>1)</sup> 人間能力の發展どころではない、先天的に存する能力も社會的、經濟的原因から消失する。かく考へた時何人が人間の意識が社會的に規定されるを否定出來よう。スミスは正しかつたである。

近代社會の三大階級 (Three Great Orders) 即ち地主、資本家、勞働者は夫々地代、利潤、勞賃によつて生活する。彼等が所得を得る方法、即ち物質的生活の生産の仕方は、この三階級の異なる性格を決定するとスミスは云ふ。

土地所有者階級 (the Proprietors of Land) — 「彼等は三階級の中その所得が己の勞働も注意も要せずして、謂はゞひとりで、且つ自己の企圖又は計畫とは無關係に手許に入る唯一の階級に屬する。彼等が地位の氣樂であり安全であることの自然の結果たる遊惰は、餘りに屢々たゞ彼等を無智又凡て國家の制規の結果を豫見し理解するために必要な知力の應用を出來なくする。」<sup>2)</sup>

勞働者階級 (the Labourers) — 「…勞働者階級程社會の衰微

により殘酷に苦しむ階級は他にはない。けれども勞働者の利益は社會のそれと嚴密に關連するが、勞働者は這個の利益を會得する事も、亦社會の利益と我身のそれとの關聯を理解する事も出來ない。勞働者の生活状態は、彼に社會の必要な消息を聞知する餘裕を残して呉れぬ。そして彼の教育習慣は通常たとひ充分に社會の消息を傳へられても是を判斷するに不適當ならしむるが如きものである……」<sup>3)</sup>

資本家階級 (those who live by profit, 包括的な名稱を下してゐない) — 「彼等はその全生涯中諸々の企圖計畫に従事してゐるので地方大地主よりも一層銳利なる理解力を持つてゐることがよくある。乍然彼等の思想は社會の利益についてよりも寧ろ我身の特殊の營業部門の利益に就いて通常練れて居るから彼等の判斷は、假令最も不偏公平に下される時と雖も(こゝいふ事は未だかつて如何なる場合にもなかつた) 此の兩者の中後者に關する方が前者に關するよりも餘程多く當になる……」<sup>4)</sup>

スミスも亦、「意識が生活を規定するのではなくて、却つて生活が意識を規定するのである」といふことを、「何時もながらの聰明な本能をもつて」認識したのだ。<sup>5)</sup>

階級社會に於ては、人間の意識が彼等の社會的存在によつて規定せらるゝ結果、所屬階級の差異に應じ、

1) W. o. N. I. p. XXIV—XXV. Editor's Introduction による。尙、同様の言を ibid. II. p. 269. に見出す。  
 2) ibid. I. p. 248. 邦譯上、572頁。  
 3) ibid. I. p. 249. 邦譯上、573—574頁。  
 4) ibid. I. p. 250. 邦譯上、574—575頁。  
 5) Marx, Die Deutsche Ideologie (Der Historische Materialismus. Herausgegeben

そのイデオロギーを異にするはスミスが右に述べた如くである。この區別は學問にも反映する。スミスは彼の體驗からこれが自覺を有せしものゝ如くである。<sup>6)</sup>

次にスミスの階級觀を考察すべきであるが、之は、彼の史觀の發展的構造と共に別の機會に讓ることゝして、以上とも角、我々は切斷面的體系的構造に於けるスミスの經濟史觀を見て來た譯である。だがスミスは勿論、その經濟史觀を包括すべき史觀を有つた譯でなく、又それ自體體系的なものでもない。むしろそれは無自覺的でさへある。經濟關係の史觀への導入とその體系付けはマルクスに至つてなされたのである。とは云へ、我々はスミスに於て既にその萌芽と考ふべきものを見るは興味ある事である。而してこの經濟史觀は具體的なる史觀の一面に過ぎないものであることは既に述べた如くであるが、この點についても亦これを別に詳論することゝする。

### 英國に於ける預金の流通速度

von S. Landshut und J. P. Mayer. II. S. 13).

- 6) Marx. Theorien über den Mehrwert. II. 2. Teil. S. 305.
- 7) W. o. N. II. P. 260. 邦譯(有斐版) III. 105頁 以下參照
- 1) 飯島樞司; 金融經濟論.
- 2) 金融事項參考書.
- 3) J. M. Keynes; A Treatise on Money p. 31.